

2021年度新収蔵資料の紹介 1

—山田秀三年賀状アルバム及び久保寺逸彦によるアイヌ語辞典—

遠藤志保

目次 はじめに

1 山田秀三年賀状アルバム

- 1) 収集の経緯
- 2) 資料の概要
- 3) 葉書の特徴
- 4) 葉書リスト
- 5) 各ページ画像
- 6) 他の葉書との比較から

2 久保寺逸彦によるアイヌ語辞典『THE AINU-JAPANESE DICTIONARY COMPILED by I.KUBODERA』

- 1) 資料の概要と収集の経緯
- 2) 資料の特徴
 - ①体裁
 - ②本資料の用途について
 - ③稿本としての特徴
 - ④アイヌ語辞典としての特徴
 - ⑤久保寺逸彦文庫資料との関連
- 3) 画像

Key Words 山田秀三 (YAMADA Hidezo)、久保寺逸彦 (KUBODERA Itsuhiko)、アイヌ語 (Ainu)

はじめに

本稿では、北海道博物館が2021（令和3）年3月から2022（令和4）年1月に新たに受け入れたアイヌ民族の歴史・文化に関わる文書資料のなかから、「山田秀三年賀状アルバム」「久保寺逸彦によるアイヌ語辞典」の2点の資料を取り上げ、それぞれの資料の概要と特徴を紹介する。

本資料を寄贈してくださった板矢柳太郎氏、久保寺芙美子氏に、この場を借りて、改めて深く感謝申しあげる。

1 山田秀三年賀状アルバム

1) 収集の経緯

本資料は、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三（1889～1992）が送付した年賀状を貼付したアルバムである。

山田秀三は東京帝国大学法学部を卒業し、農商務省、

商工省等に勤め、生涯の前半は、主に資源・産業政策に関わる官僚として歩む。資源局調査課長、仙台鉱山監督局長、内閣官房調査官、同参事官、軍需省化学部長、商工省整理部長などを歴任し、1945（昭和20）年に退官した。戦後に官僚を退職した後、自ら東北・北海道のアイヌ語地名について調べ始める。当時のアイヌ語研究の第一人者であった金田一京助氏と出会ったのもこの頃である。

特に1949（昭和24）年、北海道曹達株式会社社長として北海道に赴くようになってから、道内各地での調査を重ねていった。

山田秀三のアイヌ語地名研究における大きな功績は、既存の文献や地図を徹底的に調べ、その上で現地を確認し、さらに、同じ地名や地形のところをとことん調べる、という実証的な研究方法を確立し、アイヌ語地名研究の水準と蓄積を大きく前進させたことにある。

本資料の寄贈者は幌別町（現・登別市）にある北海道

曹達株式会社で工場長として勤務しており、社長である山田秀三から送られた年賀状を保管していた。

寄贈者は、同じ登別市にある知里幸恵銀のしずく記念館に対して、「有効に活用してほしい」との思いから、山田秀三の著作及び本資料を送った。同館としては、山田秀三関係資料については、山田秀三文庫を所蔵している北海道博物館において所蔵・保存をすることがより適切との判断をした。そのうえで、改めて寄贈者の意向を確認したところ、北海道博物館への寄贈を希望され、2021（令和3）年3月に北海道博物館資料として登録を完了した。

北海道博物館収蔵資料番号は186,235である。

2) 資料の概要

山田秀三が送付した年賀状を貼付した写真用のフリー台紙（リング製本）アルバム1冊である。アルバム本体は縦33.0cm、横26.0cm（リングを含めると28.2cm）、厚さ3.0cm。薄青の布地の表紙に、鮮やかな青の中表紙。台紙は全部で7枚、14ページ。

年賀状は表面に絵と文章が、裏面に宛先が書かれており、表面が見えるよう整理されている。アルバム1ページにつき2〜4枚の年賀状を貼付している。

貼付の年賀状（もしくは喪中葉書）は昭和36年〜平成4年分の32枚である。昭和39年分のみ抜けている。

3) 葉書の特徴

年賀状は、いずれも山田秀三自身の手による絵がかかっている。絵の題材は、馬、牛（牧場）など、その年の干支に関わる動物の絵もあるが、それよりも札幌の冬の風景、身近な風景などが多い。いずれも葉書の保存状態はよく、絵も鮮やかな色合いがそのまま残っており、褪色は見られない。

初期（昭和36年〜昭和40年）は、絵のほかには「謹賀新年」と「昭和〇年正月」、「山田秀三」の記名と住所のみだが、昭和41年頃から、絵に関する文章が通例化している。この文章は、年始とは直接関係ないものであり、絵に関連した短い随想のようにになっている。

山田秀三が所蔵していた資料（山田秀三文庫・北海道博物館所蔵）のなかに含まれる、山田秀三が行った地名調査をまとめたファイルを見ると、そのなかには現地の写真や地図、地名解だけではなく、調査の道中で出会った人や立ち寄った飲食店などについて、絵やエピソードを簡単に記していることもある。そうした地名調査の記録からも垣間見える、特に若い人びとに向けた、山田秀三の暖かいまなざしが、本資料の葉書からはさらにあり

ありと見て取ることができる。

文章及び絵の輪郭線や背景色の一部は印刷によるものだが、それ以外は水彩絵の具らしき画材による手彩色によるものである⁽¹⁾。一部の年紀（昭和45〜47年、昭和49〜51年）については、葉書の縁を枠取るように、赤インクで細く塗られている。葉書が貼付された台紙に赤インクがはみ出していることから、手彩色によるものと見られる。さらに、蔵書印としても使われている「YAMADA」の印章もひとつひとつ押捺されている（中には押し忘れと思しき年もある）。

また、それらとは別に、寄贈者に当てた書き込みも見られる。

なお、このアルバムには、年賀状及び喪中葉書ではない絵葉書が1枚だけ貼付されている（10ページ 左上）。内容から、寄贈者が山田秀三に贈答品を送ったことに対する礼状と推測される。

4) 葉書リスト

年賀状は、昭和41年正月分から始まり、以降、年の順に山田秀三の没年にあたる平成4年の年賀状まで並んでいる。さらに、その次のページから、昭和36年からの年賀状が貼付されている。

以下、アルバムに貼付されている順に、各葉書に記載されている概要について記載する。なお、表内の「/」は改行を表す。

(1) 詳細は「6) 他の葉書との比較から」にて後述する。

1ページ 左上

年紀	昭和四十一年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	幌別の新家庭御様子如何にや / その中にお邪魔に上りたく存居候
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

1ページ 右下

年紀	昭和四十二年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	雪国にて
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

2ページ 左上

年紀	昭和四十三年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	たるまえノ麓
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

2ページ 右下

年紀	昭和四十四年正月
新年の挨拶	謹賀新年

山田秀三による文 (印刷)	札幌の街並みを北に出ると牧場が多い。そこにはorchardやcloverの原っぱが広がっていて、秋になると刈られたhayが積み上げられる。古びた厩舎やsiloは何か理くつもなしに懐かしいような感じを与えてくれる。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	札幌の北郊
落款	山田秀三 / 総子、 Hidezo (サイン)、 朱文方印「YAMADA」

3ページ 左上

年紀	昭和四十五年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	北海道の冬。白雪と灰色の樹立だけの野山になる。だが若い元気な少女たちが、その中を軽やかに歩く。冬でも花が咲いているようで、明るく、楽しい。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 YAMADA (サイン)、 朱文方印「YAMADA」

3ページ 右下

年紀	昭和四十六年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	雪国の朝は、家の入口から道路迄の雪割りが家人の仕事である。この頃の街は、夜中にブルドーザーが走り、道の雪を両側にはね上げて行く。それで朝の雪割りは一そう大仕事である。こんな風景で北国一日が始まります。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—

落款	山田秀三 / ふさ子、 朱文方印「YAMADA」
----	-----------------------------

4ページ 左上

年紀	昭和四十七年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	札幌の冬。絶えず雪が降る。誰も傘をささない。お嬢さん方が、髪の上に、厚く雪がつもったまま、のびやかに歩いている。電車のなかで、それが融けてポタポタとたれるが気にもとめない。寒くてもミニの人もいる。でも雪で、ハイヒールで歩けないのが残念らしい。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

4ページ 右下

年紀	昭和四十八年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	札幌の街並みがグレンデに続いている。色とりどりの服装の健康そうな少女たちが、鳥がとぶように、右から左から滑走してくる。若さと、美しさと、明るさが一ぱいで、目がさめるようだ。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

5ページ 左上

年紀	昭和四十九年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	札幌のグレンデで。子供が、大きいお握りを、おいしそうに、幸せそうに食べていた。何とも可愛かったので描く。
山田秀三による文 (手書きの追記)	美しい九谷を有難うございました。愛用します

山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

5ページ 右下

年紀	昭和五十年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	茂津多(もった)の山。北海道の西岸、瀬棚からの街道が、この山崖で行き止まりになる。その手前にひっそりと小澳港あり。防波堤の先端に行つて目を上げて山を眺めた。人も見えないし、物音一つ聞えない。澄んだ大気の中に、しんとして立っている山壁に向つて、何だか歌を歌いたくなつたのでした。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

6ページ 左上

年紀	昭和五十一年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	札幌の土曜、日曜に、スキー場や屋外のスケート場をよく見に行く。頬をまつかにして、子供が滑っていて、若さと明るさが一ぱいだ。こうやつて育つ雪国の少年少女たちに幸あれ。私たちが若くなつたような気がします。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

6ページ 右下

年紀	昭和五二年正月
新年の挨拶	謹賀新年

山田秀三による文 (印刷)	北海道の暖房のよい室から街に出ると、時に痛いような吹雪が顔をたたくが、何だか快適也。歩いて行く人は傘をささない。乾いている雪はたけばパラツと落ちる。 / 札幌の街は冬いらっしやると特にいい処です。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子

7ページ 左上

年紀	昭和五三年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	「日高よいとこ、南を受けて、馬と女がよく育つ」と ざれ唄をつくって歌ったこともあった。北海道の日高の国は、至る処に馬牧場があつて、広々と健康な明るさが漂っている。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	午年に因んで
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

7ページ 右下

年紀	昭和五四年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	羊歳だが、うまくかけませんので、40年ぐらい前に、羊ばかり多い英国の田舎を歩いたメモをかきます。イングランドのワリックのコンモンの草原では、街のhouse holderなら、誰でも羊、馬、牛をつれて来て、放牧していました。スコットランドの草地の街道では、自動車は羊に気をつけて走れと、かいてありました。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	Warwick の 町 の Common / Scotlandの街道で見た建札

落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」
----	-----------------------

8ページ 左上

年紀	昭和五五年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	何も考えないで、樹の多い道を歩くのが好きだ。できたら若者たちの通る道を歩く。若い心が戻つて来るようだ。少しでも青年のような柔かい気持ちでいたいものです。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三 / 総子、 朱文方印「YAMADA」

8ページ 右下

年紀	昭和五六年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	北国に冬が来ると 雪が積もってまた美しくなる。その雪の上で、子供たちが、ほほを赤くして遊ぶ姿が 何ともなく可愛い。こつち迄が若くなるみたいである。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

9ページ 左上

年紀	昭和五七年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	犬の年が来た。小さなお嬢ちゃん大きな犬が歩いて来る。引きずられて ころびやしないかとハラハラして近よると、犬は子供を守るように寄り添っている。ホッとしてみたい。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—

落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」
----	-----------------------

9ページ 左下

年紀	昭和五十七年十二月
山田秀三による文 (印刷)	喪中に付年頭御挨拶を遠慮させて 戴きます。 / (妻 総子 十月 二十七日他界、七十五歳) / 例年 賀状に小さな画をかくのを楽みに 致しておりましたが、この度は御 許し下されたく存じます。本年の 御芳情に厚く御礼申し上げ、明年 も倍旧の御厚誼をお願い申し上げ ます。

9ページ 右下

年紀	昭和五九年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	子供たちの歩く道を歩くのが好き だ。何だか気持ちだけでも柔らか くなるみたいで楽しい。
山田秀三による文 (手書きの追記)	お互いが苦心をして来た懐しい幌 別工場をどうぞ何とか盛りたてて 下さるようお願いします
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」
備考	昭和59年の年賀状は2枚ある。

10ページ 左上

年紀	(不明。年賀状ではなく、寄贈者 から山田秀三への贈答品に対する 礼状)
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	北海道からのおいしそうな品を有 難うございます。これから一缶づ つ楽しんで賞味させて戴きます。朝 の食事が賑かになり嬉しいことで あります。
山田秀三による絵 のキャプション	ハンガリー土産の温泉コップ / これで温泉をのむのだそうです
落款	朱文方印「YAMADA」

10ページ 左下

年紀	昭和五九年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	子供たちの歩く道を歩くのが好き だ。何だか気持ちだけでも柔らか くなるみたいで楽しい。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」
備考	昭和59年の年賀状は2枚ある。

10ページ 右下

年紀	昭和六〇年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	珈琲店にて。ヨーロッパにコー ヒーが入ってから、西洋文化が急 に進歩したのだ、というのが私の 理論。年をとりましたが、考える 力だけは持っていたいと、せいぜ い喫茶店通いをしております。
山田秀三による文 (手書きの追記)	御二方共お元気ですか。刈田神社 の古い社殿で御結婚式を挙げられ たところが思い出されます。
山田秀三による絵 のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

11ページ 左下

年紀	昭和六一年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	つめて何かをしていると、どうし ても頭が何かの型にはまりがちに なる。だが一寸休んで、珈琲を ゆっくりと のんでいると頭が休 まるのか、また別の角度の考えが 浮んで来る。もしアリストテレス の時代に珈琲があつたら、世界の 文明はもつと早く進んだのではな かつたろうか。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—

山田秀三による絵のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

11ページ 左上

年紀	昭和六二年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文(印刷)	ウーサギ、ウサギ。なーに見て跳ーねーる。って口の中で歌いながら兎をかこうとしたが、どうもかけない。しかたがない。大好きな鳥羽僧正画を小さく模写。似て非は止むを得ない。だが、こんな気持ちで文章を書けないかな、と珈琲を飲みながら思いました。
山田秀三による文(手書きの追記)	—
山田秀三による絵のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

11ページ 右下

年紀	昭和六三年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文(印刷)	お正月は親から貰った赤い琉球塗りの大椀で雑煮。椀は百年前のもの。私はいつか数え年の九〇。だが椀より年下。いつもの朝食は若い方々が下さった遠い邦々の食器で。これが私の最高の贅沢。それで戴いた時を思い出しながら、ゆつくり珈琲を。それから道楽研究を子供のよう。調べたいことだらけ。だが怠け怠けやっています。
山田秀三による文(手書きの追記)	お二方ともお元気にしていられっやいますか。
山田秀三による絵のキャプション	HEREND HVNGARY略画 / 大ぶりなので スープ用に使っています。
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

12ページ 左上

年紀	一九八九年正月
新年の挨拶	新年のご挨拶
山田秀三による文(印刷)	若いころ へたな碁。早く止めたが、今でも朝の新聞の囲碁らんが楽しみ。だがそれよりも往来を歩いて、小さい子供たちを眺めるのが大好き。年をとってしまったが、あんな無邪気さと好奇心をいつまでも持っていたい。
山田秀三による文(手書きの追記)	—
山田秀三による絵のキャプション	—
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

12ページ 右下

年紀	平成二年正月
新年の挨拶	新年のご挨拶
山田秀三による文(印刷)	もう90歳、かわいそうに、のろのろと歩くのがやっ。でも青年の男女のよるお店の中で、コーヒーをのむのが何より、気持ちだけは若くしたいものです。
山田秀三による文(手書きの追記)	—
山田秀三による絵のキャプション	午歳に因んで
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

13ページ 左上

年紀	平成三年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文(印刷)	子供はいつも、これなーに、と云う。だが年よりの私も、何かと、あれ何のことだろうかと考え込むのだった。子供と同じように、好奇心みたいなものをいつまでも持っていたい。
山田秀三による文(手書きの追記)	—
山田秀三による絵のキャプション	—

落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」
----	-----------------------

13ページ 右下

年紀	平成四年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	昨十一月北海道新聞文化賞を受け ました。永年の地名調査に対する ものの由。だが研究はまだまだ途 上。これから若い学究がたにま じって一步一步やって行きたいも のであります。
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	戴いたトロフィー
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

14ページ 左上

年紀	昭和卅六年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	北国の丑歳
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

14ページ 右上

年紀	昭和卅七年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	胆振国有珠岳
落款	山田秀三、朱文方印「山」

14ページ 左下

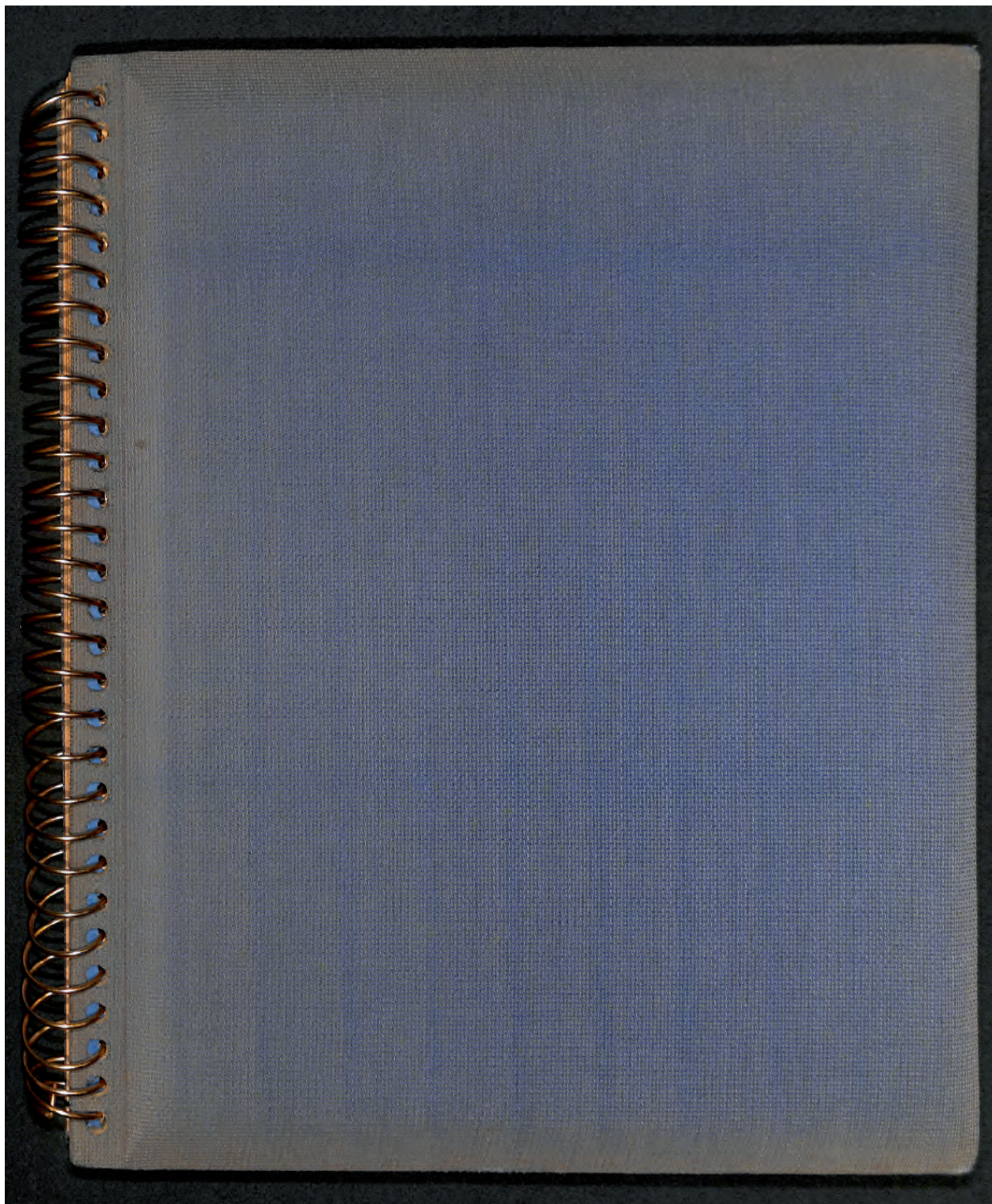
年紀	昭和三十七年十二月
山田秀三による文 (印刷)	喪中につき年末年始の御挨拶をご 遠慮申し上げます
落款	山田秀三

14ページ 右下

年紀	昭和四十年正月
新年の挨拶	謹賀新年
山田秀三による文 (印刷)	—
山田秀三による文 (手書きの追記)	—
山田秀三による絵 のキャプション	北の国の牧場
落款	山田秀三、 朱文方印「YAMADA」

5) 各ページ画像⁽²⁾

表紙

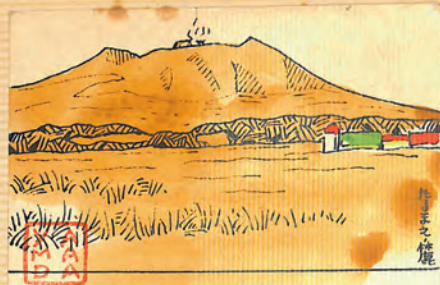


(2) 掲載した画像のうち山田秀三の個人情報（住所等）にあたる部分は塗り潰し処理を施した。

1ページ



2ページ



謹賀新年

昭和四十四年正月

山田秀三
息子

謹賀新年

昭和四十四年正月

山田秀三
息子

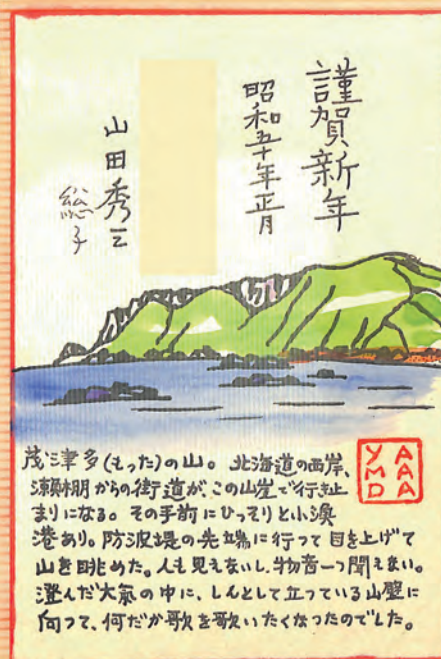


木下晃の北郊

木下晃の住み込み北に居ると牧場が多い。そこにはorchard
やcloverの原っぱが広がっていて、冬になると刈られた
hayが積み上げられる。古びた厩舎やsilosは何年か
経つともなして懐かしいような感じを覚えてくれる。







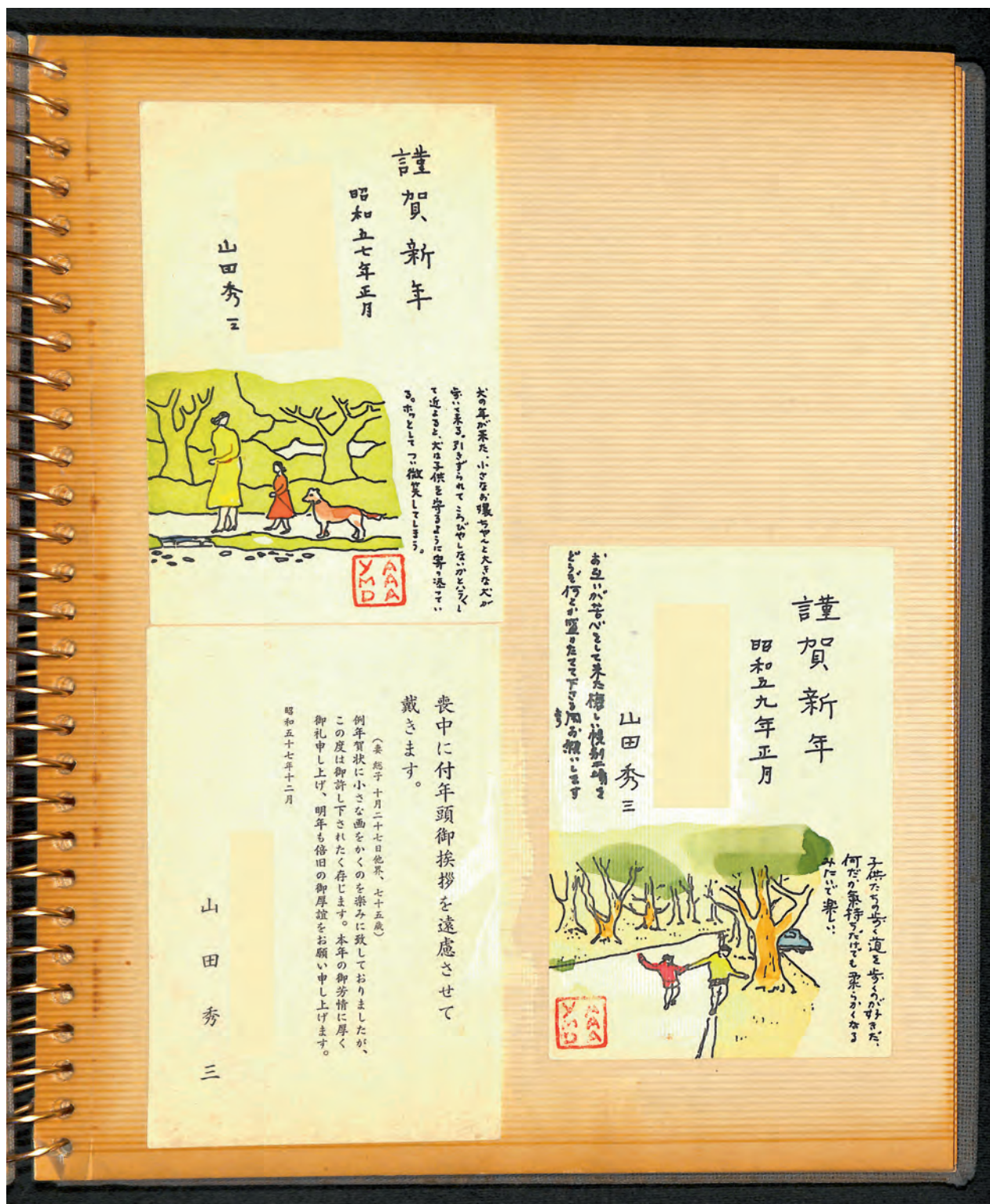


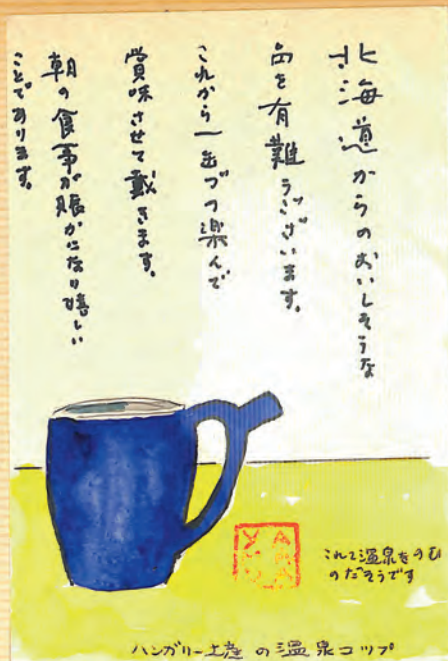
7ページ

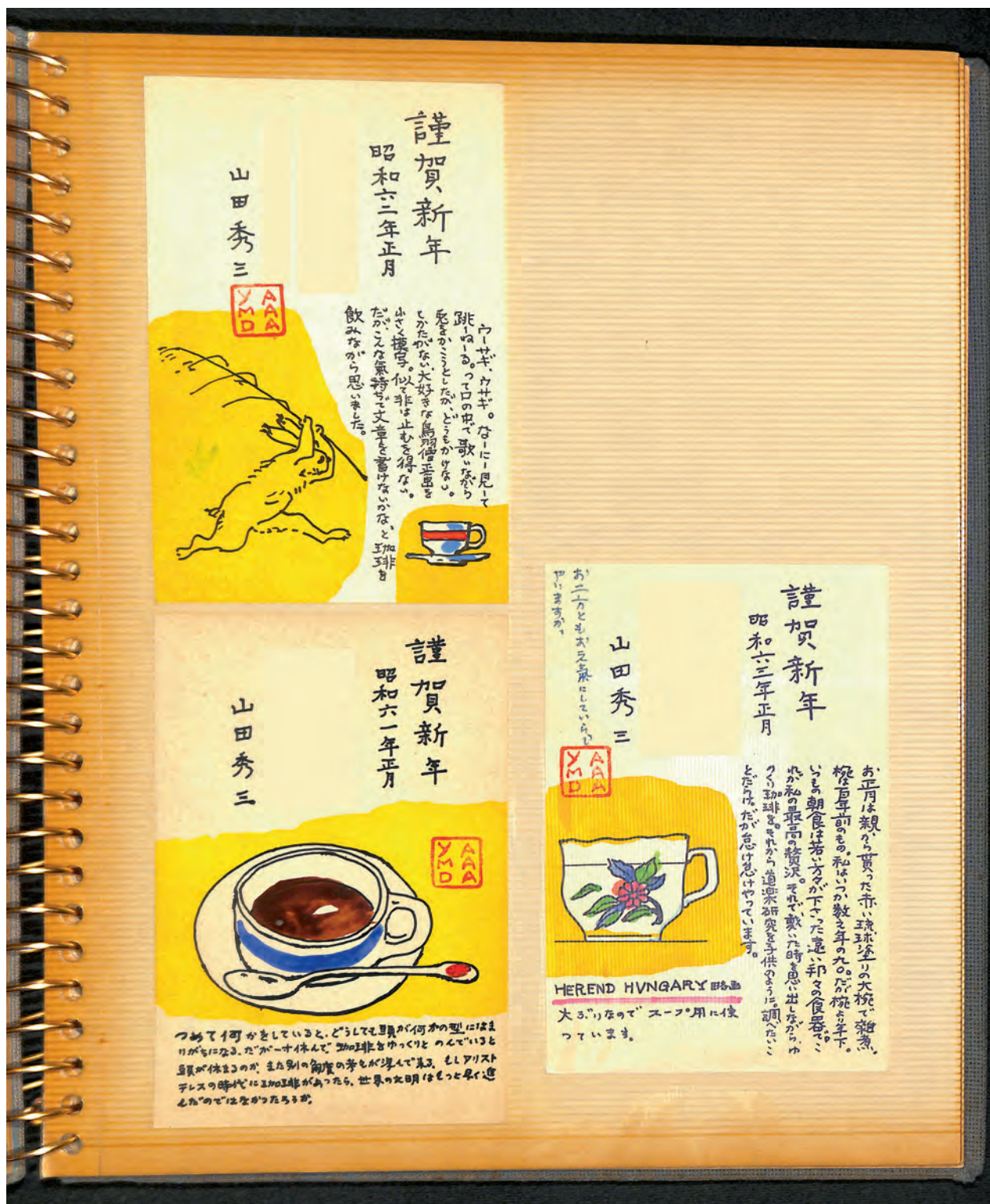


8ページ



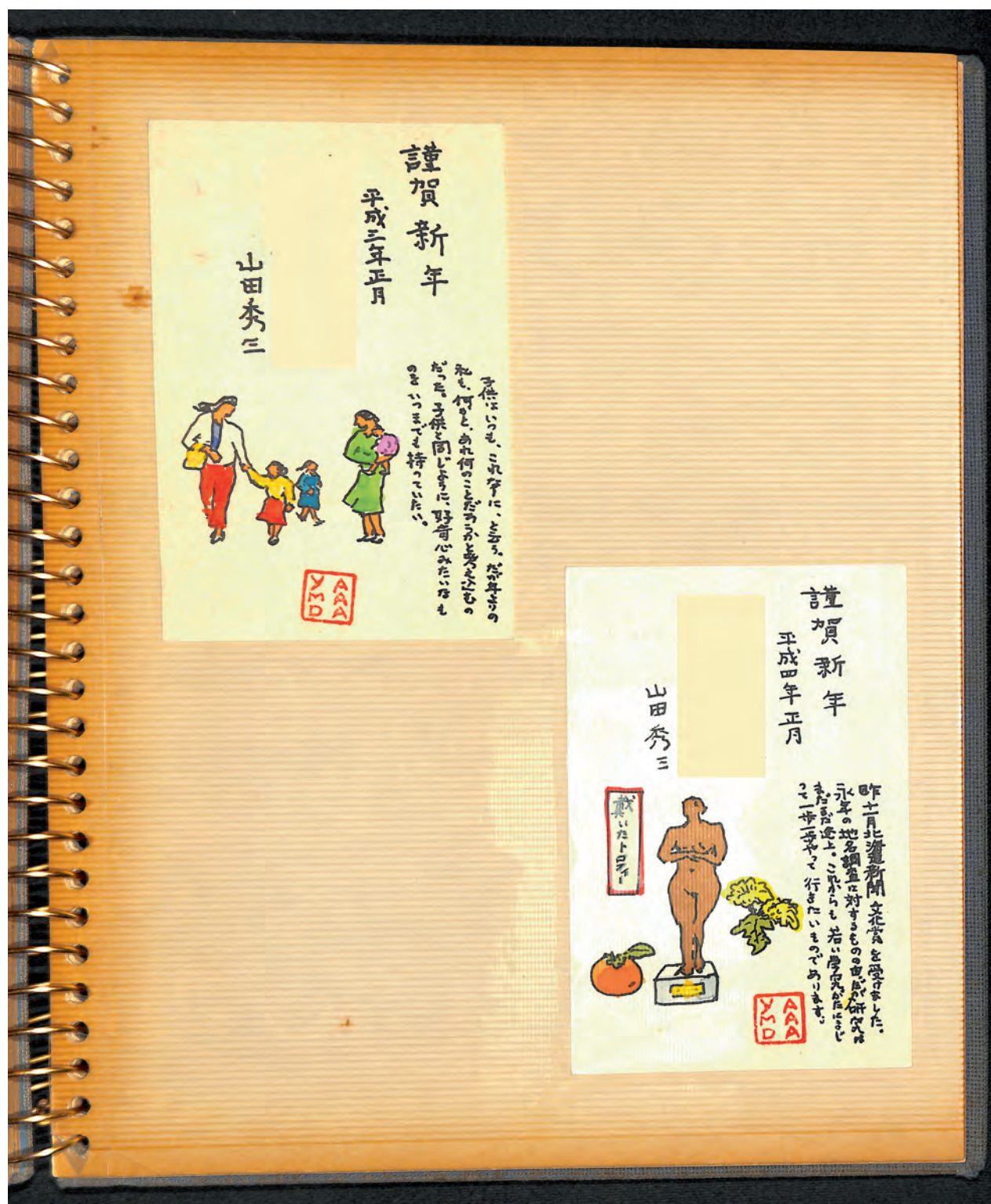






12ページ

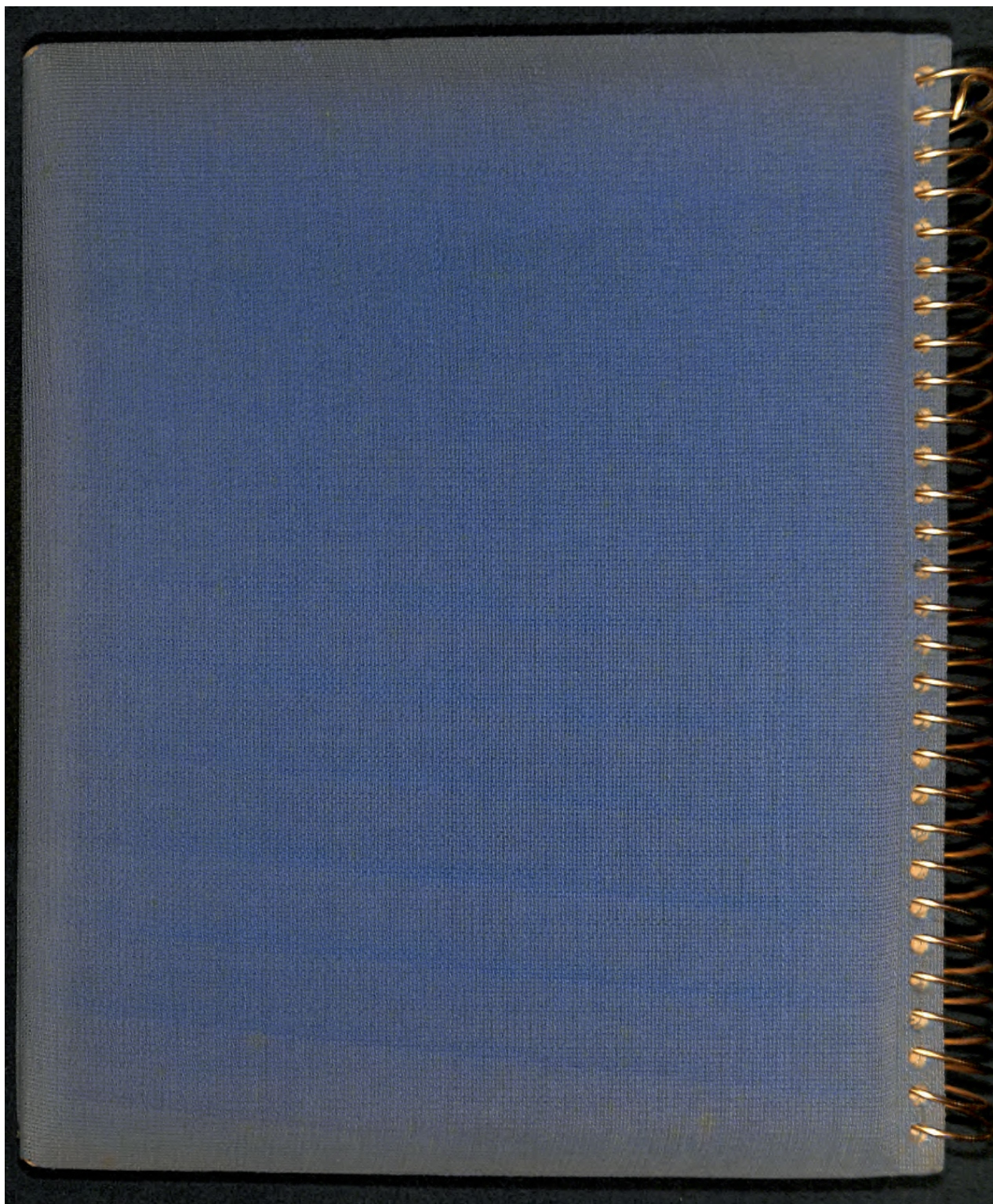




14ページ



裏表紙



6) 他の葉書との比較から

山田秀三とも交友のあった高木庄治氏（弘南堂書店）から、高木氏のもとに送られた山田秀三による年賀状5枚分のデータ提供を受けた。このデータを本資料に貼付の年賀状と並べてみると、山田秀三による年賀状が文字・輪郭線・背景色はまったく同一で印刷であるが、背景以外の塗りが手彩色であることや、「YAMADA」の印章がひとつひとつ押捺されていることがわかる。この印章は場合によってはカスレなども見られるが、おおよそ同じ場所に配置されている。

手彩色の部分は、さっと迷いなく一筆で描いたような筆運びで、しばしば塗り残しや線画からみ出ている部分があったり、濃淡があったりもするが、それ自体が山田秀三の絵の味のひとつとなっている。一方、印刷されている背景色のほうには輪郭線からはみ出ないように丁寧に塗られているようであり、印刷と手彩色を使いわけている様子うかがえる。

以下、本資料（年賀状アルバム）に貼付の年賀状と高木氏所蔵の年賀状とを並べて比較する。それぞれ左側が年賀状アルバムの葉書、右側が高木氏所蔵の葉書である。

昭和59年正月



本資料（年賀状アルバム）



高木氏所蔵葉書

並べて見ると、人物の服（赤色・黄色部分）や車（水色部分）の塗り方、木の幹や枝（茶色部分）の塗り方、背景の葉の塗り方（濃い緑の部分）に違いがあることがわかる。背景の芝生などの薄緑色の部分は印刷のようである。

昭和60年正月



本資料（年賀状アルバム）



高木氏所蔵葉書

並べて見ると、人物の髪、女性の服や椅子・本（黄色・緑色・桃色部分）の塗りに違いがあることがわかる。

昭和61年正月



本資料（年賀状アルバム）



高木氏所蔵葉書

並べて見ると、コーヒーの塗り方や水面に浮かぶハイライトの位置（白色部分）、コーヒーカップの模様（青色のライン）、スプーンの絵の塗り（赤色部分）に違いがあることがわかる。

昭和62年正月



本資料（年賀状アルバム）



高木氏所蔵葉書

並べて見ると、コーヒーカップの塗り方（青色部分・赤色部分）やウサギの背後に見える模様（薄青部分）に違いがあることがわかる。

昭和63年正月



本資料（年賀状アルバム）



高木氏所蔵葉書

並べて見ると、カップの模様の花・葉・茎、カップの影（水色部分）の塗り方、「HEREND HVNGARY略画」の下ラインに違いがあることがわかる。（なお、写真アルバムの背景の黄色に縦縞が見えるのは、写真アルバムにおけるカバーフィルムの模様が写っているもので、実際には無地である）

2 久保寺逸彦によるアイヌ語辞典『THE AINU-JAPANESE DICTIONARY COMPILED by I.KUBODERA』

1) 資料の概要と収集の経緯

本資料は、アイヌ文化研究にすぐれた業績を遺した久保寺逸彦（1902～1971）の自筆によるアイヌ語辞典である。

久保寺逸彦は北海道紋別郡雄武村（現・雄武町）で生まれ、旧制釧路中学、山梨県甲府中学を経て国学院大学に入学した。そこで言語学者である金田一京助の講義を受け、1922（大正11）年の夏休みに帯広の伏古を来訪したのが、最初に行ったアイヌ文化の調査である。

大学卒業後は、東京府立第七中学校（現・都立墨田川高校）、東京第二師範学校（現・東京学芸大学）、駒澤大学の教員を歴任し、毎年のように北海道などへ調査旅行に出かけたり、アイヌ文化伝承者を東京の自宅に招いてその協力を得たりしながらすすめた研究は、アイヌ口承文芸からアイヌの宗教儀礼を中心とした民族学までの広範な分野に及ぶ。久保寺の没後も、生前の調査研究や遺稿をもとにした刊行がなされており、2020（令和2）年には、『久保寺逸彦著作集』が全4巻で完結した。本資料の内容は、その第4巻に収められている。

本資料は、旧北海道立アイヌ民族文化研究センターが1996（平成9）年に寄贈を受けた久保寺逸彦の調査研究資料（久保寺逸彦文庫）と一体性を持つ。1996年の寄贈時には御遺族である久保寺芙美子氏からしばらく手許に置きたいとの希望があり、本資料の受入れを控えていた。

2010（平成22）年に、本資料の活字化・刊行に当たっていた編者から原本を参照したいとの照会があり、アイヌ民族文化研究センターが芙美子氏から借用することとしたが、その後、本資料を寄贈して差し支えないとの話があり、2020（令和2）年により刊行が果たされたことから、北海道博物館にて受け入れることになった。2022（令和4）年1月に北海道博物館資料（久保寺逸彦文庫）として登録を完了した。北海道博物館収蔵資料番号は186,324である。

上述のとおり、本資料は、すでにその内容が活字化されている。

一度目は、1992（平成4）年3月に北海道教育委員会より『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿）』として刊行された（以下、1992年本）。

その後、2020年に草風館より『久保寺逸彦著作集』

の第4巻（最終巻）として、『アイヌ語・日本語辞典稿』が刊行された（以下、2020年本）。この2020年本は、1992年本を「もとにしているが、本書を編むにあたって、凡例は基本的に継承しつつ、本文、索引ともに新たに組み直した」（久保寺 2020：i）というものである。

2) 資料の特徴

本資料については、1992年本及び2020年本の「凡例にかえて」に詳しい。そこから、一部抜粋し、紹介する。

①体裁

概観は、縦21cm、横16.5cm、厚さ6.2cmの黒い表紙で製本された辞典である。背には、「THE AINU-JAPANESE DICTIONARY COMPILED by I. KUBODERA」という銀文字が箔押しされている。

本資料は、封筒に梱包した状態で保管されていた（現在、封筒は外して別置している）。

用紙にはノート（横罫、1ページ23行）を使用しており、久保寺逸彦自身がノート右上に記したページ数は1057ページに及ぶ。

見出し語のアイヌ語や、ノートの記載方法については、以下のような形となっている。

見出し語はアルファベット順に配列されており、小口にインクでアルファベットの見出し文字（A, C, E, H, I, K, M, N, O, P, R, S, T, U, W, Y）が付けれられ、検索の便が計られている。各見出し文字のページ付けの内訳は以下の通り。A（1-104）、C（105-154）、E（157-234）、H（235-297）、I（299-365）、K（366-489）、M（490-524）、N（525-585）、O（587-648）、P（649-702）、R（703-750）、S（751-849）、T（852-931）、U（932-990）、W（992-1000）、Y（1002-1038）。なお、Dという見出し文字は独立には立てられていないが、CとEの間（155ページ）に *detarpe* という語が記されている。Yの部の終わりの1038ページ下段に「昭和廿四年五月二十六日脱稿」という文字がみえる。

ノートには左端約3cmの所に縦罫が印刷されている（ただし、962ページ以降は縦罫のない別種のノートが用いられている）が、それとは別に、各ページの左端から約6cmの所に一貫して鉛筆で縦罫が引かれている。これは見出し語のアイヌ語の単語、句などを記すスペースを意図したものと思われる（もっとも、そのスペースに見出し語が一貫して納まっているわけではない。はみ出して記されていることも多い）。見出し語のアイヌ語の後に日本語の

訳が記されるが、見出し語と訳語の間に品詞の別が記されていることもある。また、インデントして例文、関連語句などが列挙されていることもある。

(切替・佐藤・奥田 2020 : ix)

②本資料の使途について

本資料は、久保寺逸彦が英雄叙事詩や神謡などのテキストを読み解く際に使用するための、私的な語彙集であり、もともと出版を目的として編まれたわけではない。

久保寺自身は本資料を大いに活用したようであり、自身の学位論文でもある『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(1977年(岩波書店)として刊行)でも引用・参考文献として本資料を挙げて、次のように書いている。

金田一博士の『北蝦夷古謡遺篇』『アイヌ聖典』『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』その他の文献を整理して得た語彙・慣用句と、それに対する訳語、それに、筆者の採集した叙事・抒情文学等のノートを整理した語彙・慣用句等を加えて、アルファベティカルに配列して辞書体としたものだが、極めて欠陥が多いものである。だが、これなくしては、『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』に所収のテキストに〕妥当な訳語を発見して対訳や註解を施すことは、すこぶる困難であったかも知れない。(久保寺 1977 : 註解編凡例、〔 〕内は引用者による補足)

③稿本としての特徴

本資料は、あくまでも私的な辞典であり、「稿本」である。そのことについて、1992年本及び2020年本の冒頭で、編者は以下のように述べている。

本書は氏の研究の精華の一つであり、アイヌ語の学習・研究にとって貴重な情報を満載しているが、あくまで稿本であることに留意し、本書の利用にあたっては、必ず、巻頭の「凡例にかえて」をお読みいただきたい。(久保寺 2020 : i)

ここでは具体的にどのような点に留意すべきか詳細には書かれていないが、本資料の内容からは「稿本であること」としての特徴としては、以下のようなことが挙げられる。いずれも、主にアイヌ語の表記に関する事項であることから、アイヌ語の文法(特に音韻)を学習・理解したうえであれば、辞典として用いる際に瑕疵になることはない。

・未校正

本資料はひととおりの本文が書き上げられて合冊製本がなされた後も「書き込みを続けておられ、亡くなる直前まで手を入れておられた」(佐々木、2020 : iv)ものである。実際に、本資料を見ると「当初の記入にはブルーブラックのインクが用いられているが、欄外、行間にブルーブラックインクのみならず、鉛筆、赤インクで書き入れがなされていることもある」(切替・佐藤・奥田、2020 : ix)というように、明らかに後から書き足された見出し語や用例などの書き込みなどがあり、補訂を続けていた跡が確認できる。

ただし、本資料が公刊を目的としていなかったことから、全体をとおして必ずしも微細な校正は施されていないらしいことには注意が必要であろう。たとえば、724ページには「re(-he) n. 石」⁽³⁾という項目がある。他のアイヌ語辞典ではre(-he)には「名前」という訳語が当てられているが、本資料には「re 名」という項目が見当たらない一方、他の辞典では「石」という訳語が見当たらない。そのため、この「石」は「名」の誤記である可能性があることも考慮しなければならないだろう。

・音節末子音における母音挿入

本資料の見出し・用例ともに、音節末子音にあたる部分の母音の有無に揺れが見られる。たとえばsakirとsakiri、terkeとtereke、kurkaとkurukaの両方の表記が本資料には見られるが、それぞれ同じ語である。いずれも書き分けではなく、表記の揺れのようなものである。もっとも、これは本資料だけの特徴ではない。久保寺逸彦による口承文芸テキストの筆録においても同様の特徴が見られる⁽⁴⁾ことから、誤字ではなく、久保寺によるアイヌ語の表記法であると考えられる。

久保寺が用いている表記は、同じ語においても表記の揺れが見られる。そのため、現在広く使われている簡易音素表記のように、同じ音素(音韻)は同じ表記にしているわけではない。同じ語・同じ音素の表記を統一することよりも実際の発音に近い表記をすることを優先しているように考えられる。

たとえば、「歌うときには、韻律に関係なく、話すときは違う発音をすることがある。/ よくあるのが、音節末のrのあとに母音をつけて発音する、という現象である。たとえばkurka クルカをkuruka クルカと発音する。この現象は特に、長くのばす位置にrが当たった場合によく起こる。これは歌うときだけのことでなく話すときでも、強調などで伸ばす場合には同じことが

(3) 「n.」は名詞(noun)を表す略号。

(4) たとえば、英雄叙事詩のテキストにおいて、「shirika kata」「shirka keshta」(ともに北海道教育庁社会教育部文化課編 1991 : 72)のように同じshirka「鞘」という単語の表記に揺れが見られる。

起こる」(田村、1996b: xxiv) と記述されているように、音節末子音の後に母音をつけて発音されるという現象は観察されている。この田村の記述は「歌」についてのことだが、久保寺が多く採録した韻文文学も歌と同様に節を伴って語られることから、同じような現象が起こっており、久保寺の記述はそれが反映されたという推測もできるだろう。

・無声音と有声音の不統一

upopo「歌謡の一。頌歌」⁽⁵⁾という語については、upopoという語形で書かれていることが多いがuboboと書かれていることもある。このように、本資料のなかでは、同じ語であっても表記においては、有声音 / 無声音を統一していない。

これも前項と同様に、久保寺によるアイヌ語の表記法が、現在広く使われている簡易音素表記とは異なることに起因しており、久保寺にとって聞こえたとおりの音がそのまま表記されているのではないかと推測できる。

・音韻交替における表記

pon seta「子犬」がpoy setaと発音されるように、特定の環境において音が変化することを音韻交替というが、本資料においては、retan「白い」など聞こえる音のとおりに表記されている。すなわち、音韻交替が反映された表記である。この際に、もとの単語の形などの注記などは見られない。

・見出し語における人称接辞

本資料では人称接辞がついた状態で立項されている場合もある。たとえばaeraman「我了解しき」、aeramishkari「我知らず」の最初のaは、それぞれ口承文芸のうち物語のなかで使われる一人称主格人称接辞である。このほか、同じく一人称目的格人称接辞iが接頭したiokari「我に代つて」などのような形でも立項されている。いずれも口承文芸のなかで使われる人称であることが特徴である。

一方、日常会話で使われる一人称主格人称接辞kuが接頭している項目はそれほど多くない。見られる項目は、ku-kor-oper-po「私の死んだ娘」、ku-konukuri「我はばかり畏れる」のように、日常的に用いる語彙というよりは引導渡しで使われるような語彙が多い。引導渡しを含む祈り言葉ではkuという人称接辞も使われることから、人称接辞kuを含む語句は、日常会話から収集した語彙というよりも、祈り言葉のテキストなどで出てきた語を

人称が付いた形のまま掲載していると考えたほうが自然である。

こうした人称接辞が接続した形で見出し語が立っていることは他のアイヌ語辞典にはない特徴であるが、前述のとおり、アイヌ口承文芸を聞いたり、そのテキストを読解したりする際に使うことを目的とした辞典であることが関わってくると考えられる。物語のなかでは人称接辞が付いた形で出てくるところから、語られる物語を音で聞いたとおり、あるいはテキストに出てくるとおりの語形で辞典を引くことができるようになっており、目的に対して合理的な構成になっていると言える。

・収録されている方言

1992年本及び2020年本の凡例でも既に指摘されているとおり、本資料に収録されている方言は、

採録地域は沙流川流域が中心であると推定されるが、ほかにも胆振、日高東部、樺太、道東、道北などから地域や語り手に関する情報を伴って採録されている語彙なども少なくない。(切替・佐藤・奥田 2020: x)

のように様々である。用例だけではなく、見出し語としても、waxka「水」などの樺太方言が立項されている場合もある。久保寺が調査した地域は、道東(網走、美幌、釧路ほか)、道央(旭川、浜益、千歳)、日高胆振(浦河、様似、静内、平取、白老、登別ほか)、樺太(泊岸、富内ほか)などがある⁽⁶⁾。こうした調査の成果もあって、本資料には多くの地域の語彙が収められているのであろう。

・用例

見出し語に対する和訳のほかに、それぞれの見出し語に対して用例が多く記載されていることが、本資料の特徴である。しかし、用例のすべてに対訳が付いているわけではない。全体的な傾向としては、金田一京助によるテキストなどの既刊本から引用した用例には訳を記載していないことが多いようである。

④アイヌ語辞典としての特徴

久保寺が本資料をまとめていた1940年代頃とは異なり、現在は信頼のおけるアイヌ語辞典が複数刊行されている。そうした状況であっても、本資料は他のアイヌ語辞典には見られない特長があり、現在でもアイヌ語の学

(5) この訳は本資料に記されているもの。以下、同様。

(6) 北海道立アイヌ民族文化研究センター(2001: 160-161)による。

習・研究において非常に価値の高い資料である。そこで、他の辞典との比較も含め、本資料の、アイヌ語辞典としての特徴について概観する。

・語彙数

次表1は、本資料及び公刊されている主なアイヌ語辞典における、見出し語の数を一覧にしたものである。

表1 主なアイヌ語辞典における見出し語の数

辞典	見出し語の数
久保寺逸彦『アイヌ語・日本語辞典稿』(本資料)	約9600項目 ⁽⁷⁾
服部四郎『アイヌ語方言辞典』(1964年)	457項目 ⁽⁸⁾
中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』(1995年)	約3700項目 ⁽⁹⁾
田村すゝ子『アイヌ語沙流方言辞典』(1996年)	8400項目 ⁽¹⁰⁾
萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』(1996年)	約8000項目 ⁽¹¹⁾

一見してわかるように、本資料の見出し語の数は、他の辞典と比較しても多い。

当然のことながら、各項目のなかで、類語や派生語と言った関連語彙を掲載していたり、用例として語句・熟語を掲載していたりする場合も多く、一概に見出し語の数のみで収録語数の多寡を判断することはできない。それでも、2020年本の「索引」の総項目数が約17000語である⁽¹²⁾ことから、掲載されている語彙は、アイヌ語の辞典としては他のアイヌ語辞典と比肩する、あるいは多いと言っていいただろう。

・収録語彙の傾向(1)——口承文芸中の語彙

1992年本及び2020年本の凡例には、

収録されている語彙の傾向としては、日常生活に関する広い範囲が網羅されているというよりは、むしろ口誦文芸中に現れる語彙が中心になっているようである。この点は本書を利用する際に留意すべきであろう。(久保寺 2020 : XI)

とあるように、本資料には英雄叙事詩を中心に、口承文芸で主に使われる語彙が多い。英雄叙事詩のような韻文

のジャンルにおいてはatomte itak(直訳は「飾られた言葉」。「雅語」とも訳される)という日常語とは異なる表現や語彙が使われる⁽¹³⁾。それだけに、口承文芸から多くの語彙を拾っている本資料だけにしか掲載されていない語彙も多い。

たとえば、

cipta humi 船をつくる音が
oroneanpe 一斉に
keusitara 鳴り響く。

(中川・遠藤、2016 : 75)

のように沙流地方の英雄叙事詩では「oroneanpe」という表現がしばしば出てくる。他のアイヌ語辞典にはこの語句は掲載されていないようだが、本資料には「『一緒にになる』『相和する』と訳し得べし」と記されており、ここにあげた用例でもこれを参考にして訳注をつけている(同 : 130)。

・収録語彙の傾向(2)——見出し語に語句

本資料では、必ずしも語(word)のみが項目になっているわけではない。たとえば、kusu-ne「意志法(話者の意志を表はす)」、kusu-ne na「柔らかい命令法」、ruwe-he?「サウカ?」のような文末表現や、shirki chiki「然レバ、シカシタレバ、シカシタナラバ」のような文末表現や接続句など、句(phrase)も見出し語となっている。

特にshirki cikiのような接続詞を含む4~5音節のフレーズは、英雄叙事詩などにおいて、文をつなぐ際に頻出する表現である。したがって本資料では、アイヌ口承文芸、特に英雄叙事詩や神謡などの韻文文学の解釈のためという目的のもと、語か句かといった区別には拘らず、テキストにおいて頻出する語彙や表現を、テキストにおいて表出する形のまま立項するという方針を読み取ることができる。

・収録語彙の傾向(3)——見出し語に派生語

他の公刊されているアイヌ語辞典と比較すると、接頭辞や接尾辞などが付いた派生形が語の解説や用例としてのみならず、見出し語として立てられていることが少なくないのが、本資料の特徴である。

(7) 切替・佐藤・奥田(2020 : x)による。

(8) 同書の「序説」(p.25)による。

(9) 同書の「あとがきにかえて」(p. 433)による。

(10) 出版元である草風館のウェブサイト(<http://www.sofukan.co.jp/books/93.html>)による。(最終アクセス : 2022年1月)

(11) 同書の「日本語索引」の凡例(p.491)による。

(12) 切替・佐藤・奥田(2020 : x)による。

(13) atomte itakについては、金田一(1935)で概要が記述されているほか、中川(1987)でまとめられている。

たとえば、「ねじる」という意味のnoyeは、『アイヌ語方言辞典』にも立項されている基礎的な語彙であり、『アイヌ語千歳方言辞典』『アイヌ語沙流方言辞典』『萱野茂のアイヌ語辞典』のいずれにも立項されている。だが、noyeに接頭辞ko-「～に対して」が付いたkonoye「縋ふ」や接尾辞-re「～させる」が付いたnoyere「縋らす」といった派生語が見出し語として立項されているのは、本資料のみである。

一方で、本資料では、基礎語彙が見出し語として立項されていない場合もある。たとえば、「洗う」という意味のhurayeは見出し語にはないが、その派生語である、ihuraye「洗濯」やpone huraye「死体ノ湯濯」は立項されている。

アイヌ語の語構成について理解していれば派生語や用例から基礎語彙の意味は容易に推測できるということもあって、基礎語彙の記載は必ずしも必要としなかったのだろうと推測できる。それでも派生語や用例が多い場合は基礎語彙であっても本資料に見出し語として立項されていることから、総じて、口承文芸テキストを読むにあたって必要な語彙や情報を取捨選択した、きわめて効率的な項目立てになっている印象を受ける。

⑤久保寺逸彦文庫資料との関連

本資料の製作過程については、久保寺逸彦の薫陶を受けた佐々木利和氏が以下のように書いている。

語彙カードを基本に、単語をABC順にならべて編集したものが『THE AINU-JAPANESE DICTIONARY COMPILED by I.KUBODERA』であり、B5判の大学ノートを用いて一語一語をペンとインクとで書き上げ、それを合冊製本したものである。(佐々木 2020：iv)

ここで本資料のもとになっているとして挙げられている「語彙カード」⁽¹⁴⁾は、久保寺逸彦文庫（文書資料）のひとつとして、現在、北海道博物館に収められている。

この語彙カードとは、

久保寺逸彦先生は、金田一京助先生の教えをうけはじめた1922年のころから、『北蝦夷古語遺篇』『アイヌ聖典』などの語彙カードをつくりはじめられた。

これに加え『アイヌ叙事詩 ユーカラ研究』の語彙カードやご自身の採録された語彙カードを作製されている。カードといってもそれほど大きな形態のものではなく大学ノートなどを横14～15センチ、縦5センチ程度に切ったものを用いている。(佐々木 2020：iii-iv)

というものである⁽¹⁵⁾。

この語彙カードは1種類だけではなく、「アイヌ語語彙カード」(KD5366-01、KD5367-01⁽¹⁶⁾)のほか、「植物語彙」(KD5210)、「宗教語彙」(KD5365)のように、ある特定の分野の語彙をまとめたカードもある。これらの語彙カードの枚数・単語数と、本資料の語彙（見出し語）の数を比較してみると、次表2のようになる。

表2 本資料と語彙カードの項目数の比較

資料	項目数
本資料（アイヌ語・日本語辞典稿）（見出し語のみ）	約9600項目
アイヌ語語彙カード (KD5366-01)	2844項目 ⁽¹⁷⁾ (1422枚の裏表に記載)
アイヌ語語彙カード (KD5367-01)	3316項目 (1658枚の裏表に記載)
宗教語彙カード (KD5365-01)	3438項目 (1719枚の裏表に記載)
植物語彙カード (KD5210-02)	617項目 (638枚の裏表に記載。複数枚に渡る項目や、裏に記載のないカードもある)

このうち、「アイヌ語語彙カード」(KD5366-01)を取り上げて本資料と対照し、本資料が語彙カードをどの程度、あるいはどのように反映して作成されたのか、その一部ではあるが、見ていきたい。

アイヌ語語彙カードは全部で1422枚のカード（前述のとおり、ノートを裁断したもの）である。ただし、このうち34枚は縦10センチ程度で、他のカードよりも倍近く大きい。いずれも裏表両面に記載されている場合が多く、裏と表をそれぞれ1つの項目として数えると、全部で2844項目になる。ただし、全2844項目のうち、白紙が561項目、一度書かれた語彙が取り消し線で消されているものが81項目ある⁽¹⁸⁾。また、中には「murirの巻き方」(0757⁽¹⁹⁾)のように語彙というよりも民俗調査の

(14) 以下、本稿では、久保寺逸彦文庫文書資料に収められている「アイヌ語語彙カード」(KD5366-01及びKD5367-01)、「宗教語彙カード」(KD5365-01)、「植物語彙カード」(KD5210-02)をまとめて「語彙カード」と記す。

(15) ただし、佐々木利和氏によると、久保寺がすべてのカードの語句を記入したわけではなく、何人かの学生にも語彙カードを書かせていたとのことである。実際に語彙カードには、久保寺のものとは明らかに異なる筆跡のカードが散見される。

(16) KDで始まる数字は北海道立アイヌ民族文化研究センターによる久保寺逸彦文庫の整理番号。以下、同様。

(17) 項目数には白紙を含む。以下、KD5367-01とKD5365-01も同様。

(18) 取り消し線で消されている項目は、本資料でも同じ内容で立項されているものが多い。そのため、内容が誤っていることで取り消したとは考えられず、取り消し線が書かれている理由は不明である。

関連だと考えられる項目が15項目ある（その多くは項目名が書かれているのみである）。これらを除くと、アイヌ語の語彙や用例が書かれているのは2204項目である。

このアイヌ語語彙2204項目が、本資料（アイヌ語辞典）にどれほど掲載・反映されているか、本資料の語彙と比較すると、本資料に見出し語として記載されている項目⁽²⁰⁾が1332項目、本資料に用例（見出し語以外）として記載されている項目が172項目、本資料に記載されていない項目が700項目となっている。したがって、アイヌ語語彙カードに記載されている語彙の7割程度が本資料に見出し語及び用例として記載されている。

単に見出し語が一致するだけではなく、和訳・用例を含めて、本資料とアイヌ語語彙カードが完全に一致する項目も多い。たとえば「chashnatara」という項目は「さわやかなり」という訳も、それに続く「asampe-pawa, asampe-kesh wa / koshituriri, itemka maune（生きかへる微風のやうに） / aekeutum, chashnatara」という用例も本資料（p. 110）とアイヌ語語彙カード（2828）とで一致している。

一方で、見出しは一致するが訳や用例が異なる項目もあり、複数の出典やカードを統合及び取捨選択して本資料が編まれた様子もうかがえる。

訳や用例が異なる項目としては、たとえば本資料には「shi-iku 1～3頃催す」とだけ記載されているが、アイヌ語語彙カードには同じ「Shi-iku」という見出しのカードに「酒を多く用意しての小宴 / 大きか Shinurappa. / 1月～3月」（1227）とあるように、本資料には和訳や用例が記載されていないか、きわめて簡潔な項目であっても、アイヌ語語彙カードでは記述が詳しい場合もある。

これとは逆に、本資料には訳や用例が記載されているが、アイヌ語語彙カードには訳も用例もない、見出し語のみのカードも見られる。アイヌ語語彙カードには複数のカードに同じ単語が書かれている場合もあることから、複数のカードの内容が統合されて本資料の記載となったことが推測できる。

一方で、アイヌ語語彙カードのうち、3割程度は本資料に反映されていない語句である。たとえば「アイヌ語語彙カード」には「ramu-yupke / 神の気性の荒いこと

/ Ant. Ramu-hauke」（0791）とあるが、これは本資料には記載されていない単語である。

本資料に反映されていない語句のなかで多数を占めているものは、アイヌ語語彙カードの見出し語や用例の右側に「葬140」（0044）のように出典と思しき記号が付記されている項目である。この番号については、すでに1992年本や2020年本の解説で、

「葬817」は葬送儀礼の語彙であることを示したもののだが817の番号については不明である（佐々木、2020：iv）

と書かれている。「葬」以外にも「祖」、「パ」もしくは「パコロ」、「酒」、「パセ」などの種類が確認できる。いずれも様々な儀礼や信仰に関わる語彙であろう⁽²¹⁾。この記号＋番号が付されているカードは、そのほとんどが本資料（辞典）には記載されていないことから、語彙カードの段階では多く拾われていた儀礼や信仰に関連する語彙が、本資料に統合される際には意図的に外されたと考えられる。

この他にも、見出し語の右側に「吉田11, P49」（0669）、「吉田、20 P.18」（0794）のように、出典と思しき書き込みがされている項目もある。この「吉田」は吉田巖による調査をまとめて刊行した帯広市社会教育叢書（後に帯広叢書）のことを指す。これらの「吉田」という出典が記載されている項目も、本資料には反映されていない。

この「アイヌ語語彙カード」（KD5366-01）以外の語彙カード集においても基本的な傾向は同じである。たとえば、「宗教儀礼語彙カード」（KD5365-1）にも葬制や宗教儀礼に関する語彙が多く含まれているが、これらも本資料に反映されていない語彙が多い。たとえば、宗教語彙カードのなかに「kuwa 1 杖 2 墓標 / ～ pennish 杖の上端 / ～ pan-nish」（0003）というカードがある。一方の本資料では、kuwaの項目として「杖」「墓標」はあるが、用例としてpennish / pannishを使った用例はない。「kuwa-mura 墓地で、埋葬後」（0005）や、「kuwa ruye（近文） / =kuwa mura」（0011）も、本資料には記載がない。

(19) カードに付した4桁数字は、久保寺逸彦文庫を整理した北海道立アイヌ民族文化研究センターによる、整理のためのノンブル。以下、すべて同様。なお、語彙カードには久保寺逸彦自身によるノンブル（通番）は付されていない。

(20) 前述のとおり、本資料では音節末子音の有無に揺れがあることから、shipusukep（アイヌ語語彙カード：0060）とshipushkep（本資料）のように音節末子音の有無のみが異なる場合も同じ語彙として教えた。

(21) それぞれ「葬」は葬制儀礼、「祖」は祖霊祭祀、「パ」もしくは「パコロ」はパコロカムイ（疱瘡神）、「酒」は酒造関連儀礼、「パセ」はパセオンカミのことだと考えられる。さらにそれぞれ、久保寺による論文（「アイヌの葬制―特にその他界観に就いて」（1955）、「沙流アイヌの祖霊祭祀」（1952）や「アイヌ族の祖霊祭祀―Shinurappaの宗教的儀礼に就いて」（1953）、「アイヌの疱瘡神『パコロ・カムイ』に就いて」（1940）、「アイヌの古俗 酒の醸造及びその祭儀」（1935）、「北海道日高国二風谷コタンに於ける家系とパセ・オンカミ『尊貴礼拝』」（1953、1954））と対応する可能性も考えられるが、数字が指すものも含めて未詳。

一方、宗教語彙カードには、信仰や儀礼に直結しないような語彙も含まれているが、そうした語彙は本資料に反映されていることが多い。たとえば宗教語彙カードにある「eoyan へ打上ゲラレル」(3375)という語彙は、そのまま本資料でも「eoyan へ打上げられる」として記載されている。

このほか、「植物語彙カード」(KD5210-02)に記載されている語も、本資料には見られる。たとえば、enenke-ni「タランボの木」(0027)は植物語彙カードでは対応する植物の学名やアイヌ語での別名(方言)と思しき内容が詳しく書かれている。本資料では、その詳細な内容は引用されておらず、和訳のみとなっているが、enenke-niという項目は記載されている(p. 189)。このカード群にも植物とは直結しないような語彙が含まれており、そのなかには本資料に反映されているものもある。

このように、語彙カードの記載をそのまま本資料(辞典)に丸写しているのではなく、各語彙カードの項目の取捨選択、訳や説明の統合や取捨選択を経て、本資料がまとめられた様子がうかがえる。その結果、語彙カードと本資料とでは和訳や説明に違いが見られる語彙も少なくない。

以上のように語彙カードと本資料とを比較すると、「アイヌ語語彙カード」、「植物語彙」、「宗教語彙」のいずれもが、本資料には反映されているものの、それぞれのカードのなかでも信仰や宗教儀礼に関する語句(特に「葬」「祖」の記号+数字が付記されている語句)については、本資料には収められていないものが多い。

こうした宗教儀礼に関する語彙が除かれている理由としては、本資料が、単なる「アイヌ語の単語を集成した語彙集」ではなく、「口承文芸のテキストを読むための語彙集」という目的のために編まれたからだと推測できる。吉田巖による著作から拾った語彙を本資料に反映されていない理由も、吉田巖の記録が口承文芸のテキストそのものではないことが一因であろう。吉田巖の記録には口承文芸も含まれているものの、公刊された資料集を見る限りは、日本語訳を基本として、そのなかにアイヌ語を交えて書くという、民俗調査に近いまとめ方がされている。そのため、口承文芸テキストとは別の扱いとし

て、本資料には反映しなかったものと考えられる。

そして、収集した宗教儀礼関係の語彙を本資料ではわざわざ外しているということから、久保寺の認識として、「英雄叙事詩などの韻文文学の語彙は、宗教儀礼に関する語彙(言い換えれば、祈り言葉における語彙)とは別物である」という前提があったという推測もできる。

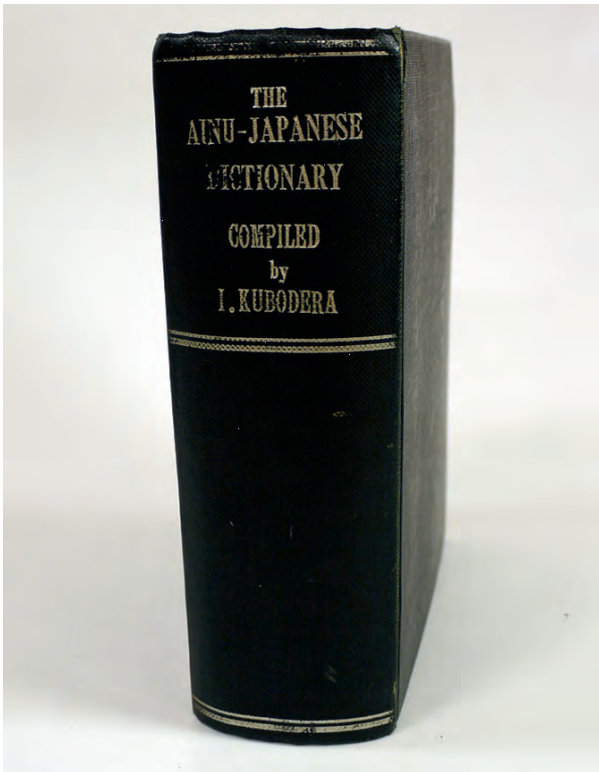
本資料は久保寺のアイヌ口承文芸の資料整理・研究の「精華」ではあり、今後も多くの人のアイヌ語・アイヌ文学の学習に資するだろう。だが、宗教儀礼に係る語彙が本資料には必ずしも反映されていないように、久保寺の研究成果にはまだ公刊されていないものも多い。久保寺のアイヌ語・アイヌ文化研究の集積である、久保寺逸彦文庫は未公開資料もまだ多くあり、久保寺逸彦の研究資料を預かる北海道博物館としては、引き続き、本資料を含めた資料整理を励行していきたい。

引用・参考文献

- 萱野茂. 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典. 三省堂.
- 切替英雄・佐藤知己・奥田統己. 2020. 凡例にかえて. (久保寺逸彦. 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館. 所収)
- 金田一京助. 1935「原始文学としてのユーカラ」1992『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』三省堂. : 381-408.
- 久保寺逸彦. 1977. アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究. 岩波書店.
- 久保寺逸彦. 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館.
- 佐々木利和. 2020. 『久保寺逸彦著作集 4 アイヌ語・日本語辞典稿』の刊行に寄せて. (久保寺逸彦. 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館. 所収)
- 田村すゝ子. 1996a. アイヌ語沙流方言辞典. 草風館.
- 田村すゝ子. 1996b. 『アイヌ語音声資料選集—韻文編—』早稲田大学語学教育研究所.
- 中川裕. 1987「アイヌ語研究とフォークロア—アイヌ口承文芸の文体—」『国文学 解釈と鑑賞 52巻7号』至文堂. : 125-131.
- 中川裕. 1995. アイヌ語千歳方言辞典. 草風館.
- 中川裕・遠藤志保編. 2016. 国立民族学博物館研究報告No. 134 国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵ノートの研究.
- 服部四郎編. 1964. アイヌ語方言辞典. 岩波書店.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1991. アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズX 久保寺逸彦ノートV. 北海道教育委員会.
- 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 2001. 北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録5 久保寺逸彦文庫 文書・写真資料目録.

3) 画像

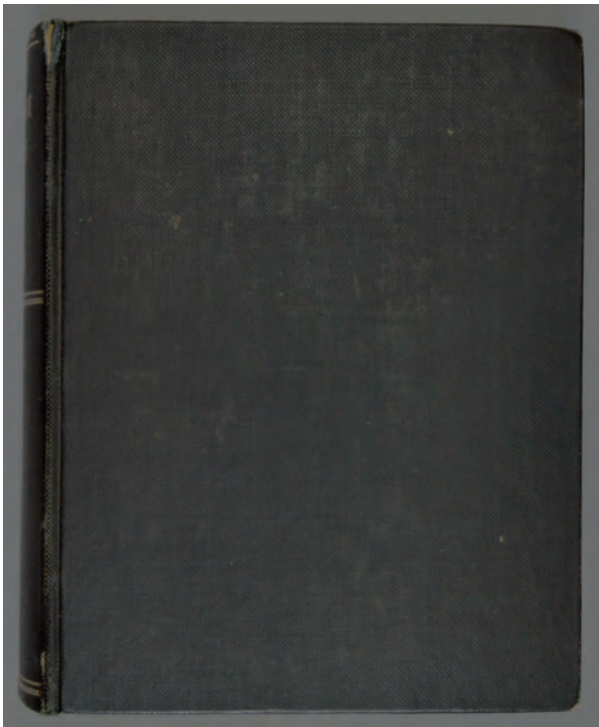
背表紙⁽²²⁾



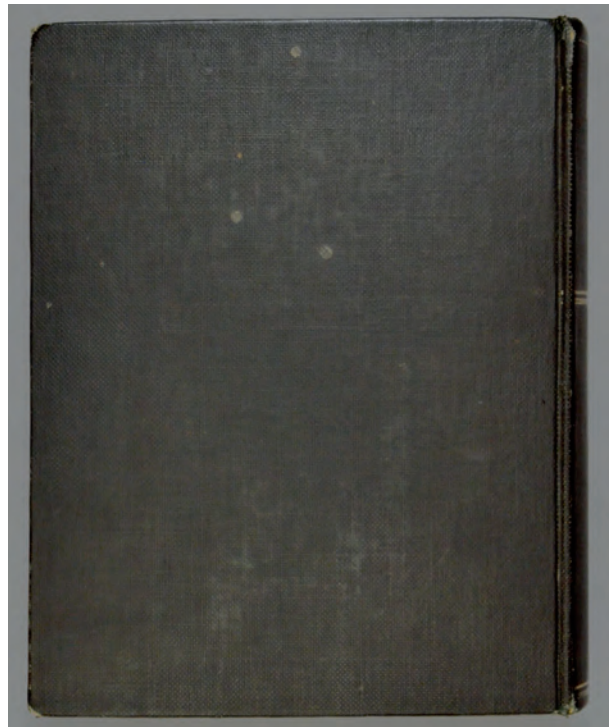
小口



表紙



裏表紙



(22) 背表紙及び小口の写真は、久保寺（2020）の口絵より引用。

Introduction of Objects Entering Museum Collection during 2021 Fiscal Year, Part 1:

Album of New Year Postcards from YAMADA Hidezo, and The Ainu-Japanese Dictionary Compiled by KUBODERA Itsuhiko

ENDO Shiho

As one of Hokkaido Museum's "Object Introduction" documents, this paper describes two of the objects which have been registered into the museum collection from March, 2021 to January, 2022: an album of New Year postcards from YAMADA Hidezo, and the Ainu-Japanese Dictionary Compiled by KUBODERA Itsuhiko.

One of the introduced objects is an album containing New Year postcards sent by YAMADA Hidezo, a leading figure in research on Ainu place names. The donor served for many years as manager of a Hokkaido Soda Co., Ltd. factory located in Horobetsu town (now Noboribetsu city). Over a

period of more than 20 years, YAMADA Hidezo, who was president of the company, sent New Year postcards to the donor, who kept and filed them in an album.

KUBODERA Itsuhiko has left a legacy of tremendous accomplishments in Ainu cultural research. This paper introduces a dictionary, written in his own hand, which he created in order to study documents such as transcriptions of Ainu oral literature. While Kubodera created the dictionary for his own personal use, it contains many terms not found in other Ainu dictionaries, and is highly valuable in Ainu scholarship and research.